

病の事、身延の事（『身延山御書類聚』より）

『兵衛志殿御返事』（定本一六〇六頁・弘安元年）

（本文）

かゝるふしぎ候はず候に、去年の十二月の三十日よりはらのけの候しが、春夏やむことなし。あきすぎて十月のころ大事になりて候しが、すこしく平愈つかまつりて候へども、やゝもすればをこり候に、兄弟二人のふたつの小袖、わた四十両をきて候が、なつのかたびらのやうにかろく候ぞ。ましてわたうすく、たゞぬのものばかりのもの、をもひやらせ給へ。此の二（ふたつ）のこそでなくば、今年はこゝへしに候なん。其の上、兄弟と申し、右近尉（うこんのじよう）の事と申し、食もあいついて候。

人はなき時は四十人、ある時は六十人、いかにせき候へども、これにある人々のあにとて出来し、舎弟とてさしいで、しきぬ候ぬれば、かゝはやさに、いかにとも申しへず。心にはしづかにあじちむすびて、小法師（こほつし）と我身計り御経よみまいらせんとこそ存じて候に、かゝるわづらわしき事候はず。又としあけ候わば、いづくへもにげんと存じ候ぞ。かゝるわづらわしき事候はず。又々申すべく候。なによりも多もんの大夫志ととの御事、ちゝの御中と申し、上のをぼへと申し、面にあらずば申しつくしがたし。恐々謹言。

（現代語訳）

こんな不思議なことはないところに、去年の十二月三十日から腹の具合が悪くなり、春夏になっても下痢が止まらなかつた。秋も過ぎて十月のころ、一時ひどくなり、ようやく良くなってきたものの、とかく起こりがちという状態である。そんな折り、（池上）兄弟二人からの贈物である二つの小袖、綿は四十両（千五百グラム）もあるものを着たが、まるで夏の帷子のように軽く感じられた。ふだん着ている綿の薄い布物ばかりの着物とはとても比較にならず、この二つの小袖がなかつたならば、今年凍え死にをしたかもしれない。その上、貴殿（兵衛志）ら兄弟からのといい、右近尉からのといい、食糧も相次いで届いている。

この身延には人の少ない時でも四十人、多い時は六十人も滞在しており、その数はどんなに断わつても、ここにおる者の兄だからといってはやって来、また弟だからといっては入ってくるので、面と向かつて断わることもできない。内心では静かに庵室を結んで、小法師と自ら（聖人）だけで御経を讀んでいたいと思っているのだが、こんな煩わしいことはないと感じる。年でも明けたら、どこかへ逃げようかと思うほどで、こんな煩わしいことはない。またまた申し上げたいと存じるころである。しかしながら何よりも喜ばしいことは、兄・衛門大夫志と貴殿の御事で、父上との間が円満に解決したことといい、また主君の覚えもよいということなど、直接お目にかかった上でなければ申し尽くすことができないと思われる。